

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 19 日現在

機関番号：14501
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：22720008
研究課題名（和文）「幸福論」としてのアリストテレス倫理学の統一的研究

研究課題名（英文）Aristotle's Ethics as Eudaimonics

研究代表者

茶谷 直人 (CHATANI NAOTO)
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号：00379330

研究成果の概要（和文）：

本研究は、アリストテレスによる一連の倫理的探究を「幸福（eudaimonia）論の諸相」として統一的に捉えつつ、理論としての幸福論、およびそのもとの個別理論の内実と意義を、並行的・相補的に探るものである。そして一連の研究を通じ、(1) 彼の愛論が幸福概念および主題としての幸福論を基礎とすること、(2) 彼の倫理学が魂論および形而上学と分ち難く結びついていること、などを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

In this research I understand Aristotle's ethical inquiries as variations of eudaimonics and thereby attempt to elucidate his eudaimonics (as subject) and particular discussions in his ethics. Through a series of examination, I made clear that (1) Aristotle's theory of love (philia) is based on that of eudaimonia, (2) his ethics has close relation to his metaphysics and theory of soul, etc.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	700,000	210,000	910,000
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
平成 24 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：西洋倫理学、アリストテレス、幸福

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は研究開始に先だって、アリストテレスにおける倫理学の学的な特質、およびアリストテレス倫理学における主要概念（善、幸福、徳、中庸、感情など）について

の考察を進めていた。そしてその中で、第一哲学（「在る」をめぐる学）において「実体（ousia）とは何か」の探究（実体論）が焦点的作業となるのと類比的な仕方、倫理学（「よい」をめぐる学）においては「幸福（eudaimonia）とは何か」の探究こそが焦点

的位置を有する、との結論に至った。そしてそれにより、「幸福論」という営みが一連の多様な考察をまさに「倫理学」として統一的に保持せしめるものであるという着想を得、アリストテレス倫理学の研究手法上、幸福概念の探究と個別テーマの考察を相補的・循環的に遂行していくことが合理的であるという見通しを得るにいたった。すなわち、一方では(1) 個別議論の分析の積み上げにより幸福概念がより内実豊かに捉えられ、他方では(2) 幸福概念の内実を見極めることで倫理学上の各議論が統一的相のもとで捉えられることになる、という見通しである。

2. 研究の目的

以上の着想のもと本研究は、アリストテレス倫理学において展開される一連の考察を「幸福論の諸相」として捉えることによって、それぞれの考察場面に存在する解釈上の主要諸問題について、文脈のごとの個別的事情を認めつつも幸福を焦点とする仕方で統一性を保持しつつ、理解・解決することを試みる。

具体的には本研究は、上で述べた見通しの(1)と(2)に対応した二つの相において展開される。ごく簡略に記すならば、一つは、アリストテレス倫理学の主要概念をめぐる解釈上の問題の解明である。すなわち、倫理学の各論を「幸福論のヴァリエーション」としても捉えつつ、それらに存する解釈上の主要諸問題の解明をめざす。それにより、各理論の内実を見定めると共に、諸言説における首尾一貫性の有無の精査、各理論の現代的或いは事柄としての意義についても一定の知見を得ることを目指す。もう一つは、一つ目の作業と表裏一体をなすものであるが、倫理学各論についてのそうした個別的考察作業を通じ、幸福という概念、アリストテレスにとっての幸福論という営みそのものの内実と意義を結果的に浮かび上がらせることである。なお、そうして浮かび上がった内実理解がひいては(幸福論の一つとしての)各論の理解を明晰にせしめるということを考えれば、相補的な関係にある。

3. 研究の方法

本課題の研究方法は、上記の二つの相に即応している。すなわち第一に、幸福概念および幸福論と関連が深いと予想される倫理学各論における解釈上の問題について取り組んだ。これに関しては、年度ごとに1~2つ程度の問題を取り上げ、すべての期間に渡って取り組んだ。第二に、これら各論についての考察と並行してあるいは一体化させる仕方で、アリストテレス倫理学・幸福論・徳倫理

の持つ基本的な特徴についての解明作業、および、アリストテレス倫理学と深く関連する哲学上の諸問題(魂論、形而上学など)についての検討作業を行い、二つの相の相補的・相乗効果的理解を試みた。

なお、一連の取り組みにあたっては、一次・二次文献の精読・分析を基本的作業とした。ただし、自らの見解を批判的に吟味・改善するため、アリストテレス倫理学、さらには本研究が扱う関連領域(自然哲学、存在論、詩学)を含む国内外におけるアリストテレス研究者との討議および意見交換を、研究会、文献講読会の開催という形で積極的に行った。また、テキストの内実を無視して安易に現代性のみを追求することを避けるため、国内外における貴重文献の収集と精査という文献学的作業も随時進めた。さらに、研究代表者が所属する専修の大学院生に、文献・情報の収集・整理について協力を適宜仰いだ。

4. 研究成果

以下に、研究成果を年度ごとに記す。

2010年度(平成22年度):

初年度はまず、理論としての幸福論の内実と意義を探る上での基礎的作業として、幸福の定義およびアレテー論において中核的な概念の一つである「魂の部分」という知見について、倫理学著作における魂部分論の内実理解の明晰化、および魂論の本来の場面である『デ・アニマ』における魂部分論との異同の探究を中心に、研究を遂行した。その際、倫理学における魂部分論が『デ・アニマ』における階層的魂部分論とは異なる独自の営みであるとの近年の解釈に対する応答も試みた。その結果、前者において提示される二分法的魂部分論は後者における階層的魂部分論と齟齬をきたすものではないことを明らかにした。また、前者における部分論も、「二分法的」というレッテルはあくまで一面的なものであり、そこで展開される部分論は総じて後者における階層的部分論を理論的基礎として展開されている、との知見を提示した。また、倫理学を含むアリストテレス哲学全般に関わる基礎理論であるデュナミス/エネルゲイア論についての理解の明確化を試みる一環として、デュナミス/エネルゲイア論に関する近年の主要研究書であるJ. Beere 著 *Doing and Being* について書評を行った。

2011年度(平成23年度):

(1) アリストテレス魂論の解釈上、最大の焦点の一つであるいわゆる心身問題について、

近年提示されたチャールズの心身相即説 (psycho-physical interpretation) の批判的検討を手がかりとしながら考察した。それにより、チャールズの心物相即説 (心的事象を、形相・質料の両面を不可分離的に有する存在であるとする解釈) を基本的には肯定的に評価しつつも、この説は、それ自体多様性を有するアリストテレスの心身理解において一つの見方として、相対化された仕方では位置づけられることを示した。(2)アリストテレスを含む古代徳倫理の基本的内実にはアクセスする一環として、ソクラテス哲学における主要徳の一つである「敬虔」を主題とするプラトン『エウテュプロン』について、対話相手 (エウテュプロン) の哲学的立場に注目しながらテキスト分析を行った。それにより、エウテュプロンの内に、正・不正と善悪を同一視するソクラテス的徳観に通ずるものを見出す事ができ、それが対話のもつ意義の一つを形成していることを示した。

2012 年度 (平成 24 年度) :

(1) アリストテレスの愛 (philia) 論において導入される、三種の愛 (徳故の愛、有益性故の愛、快故の愛) の帰一性の議論に関して、それらが何故そしてどのように帰一的関係にあるのかという解釈上の難問を考察した。それにより、諸愛の帰一性における鍵概念が「幸福 (eudaimonia)」であること、そしてそのように解することで、諸愛の帰一的関係が図式的に妥当性を保持し、かつアリストテレス倫理学全体との整合性を保持することを合理的に確認できる、との知見を提示した。

(2) アリストテレスの「徳倫理」の基本的特徴を、応用倫理学の文脈を踏まえながら考察した。それにより、彼自身の立場は行為中心主義と徳中心主義の中間に位置すること、彼独自のケーススタディ的アプローチを提示していること、帰一性を核とする彼の幸福論が倫理的営みの多様性を緩やかに統一する機能を果たしうること、などを示した。

(3) 徳論および幸福論をめぐる基礎概念である「魂」について、それを主題的に論じた『テ・アニマ』の心 (魂) 身論を質料形相論の枠組みに照らして考察した。それにより、アリストテレス魂論・心身論には、質料・形相と結合実体の不可分性を強調する非二元論的方向性と、それらの分節を強調する非一元論的方向性が両存していること、そしてそれは質料形相論一般に見出される併存の一つのかつ核心的な具体的場面である、ということを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 茶谷直人

「アリストテレス心身論における心物相即説 (psycho-physical interpretation) をめぐって」(『神戸大学文学部紀要』第 39 号、2012 年)
査読無、pp. 1-17.

② 茶谷直人

「『エウテュプロン』におけるエウテュプロン」(『愛知』神戸大学哲学懇話会編、第 23 号、2011 年)
査読無、pp. 38-53.

③ 茶谷直人

「アリストテレスの魂部分論についての一つの視点——『デ・アニマ』と『ニコマコス倫理学』」(『神戸大学文学部紀要』第 38 号、2011 年)
査読無、pp. 1-16.

[学会発表] (計 4 件)

① Naoto Chatani, Aristotle's Virtue Ethics and Applied Ethics
4th International Conference: Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia
at Kobe University
2013 年 4 月 7 日

② 茶谷直人

「アリストテレス哲学における〈部分〉と〈全体〉——質料形相論 (hylomorphism) としてのメレオロジー——」
日本科学哲学会第 45 回大会ワークショップ
宮崎大学
2012 年 11 月 11 日

③ 茶谷直人

「アリストテレスにおける愛の帰一性」
日本倫理学会第 63 回大会
日本女子大学
2012 年 10 月 13 日

④ Naoto Chatani

Aristotle and the Unity of Bio-Medical Ethics
The 6th International Conference on Applied Ethics

at Hokkaido University
2011年10月27日

〔その他〕

書評： Jonathan Beere, *Doing and Being: An Interpretation of Aristotle's Metaphysics Theta*, Oxford University Press 2009,
『西洋古典学研究』
(LIX, 日本西洋古典学会編 2011,
pp. 173-176)

ホームページ：

http://www.lit.kobe-u.ac.jp/philosophy/kyoukan/naoto_chatani.html

(神戸大学大学院人文学研究科哲学コース
Web サイト内の教員プロフィール)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

茶谷 直人 (CHATANI NAOTO)

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：00379330